

弥生時代から卑弥呼の邪馬台国・大和初期王権 日本統一国家形成へ 時代を動かした鉄
2010 年秋 関西各地で開催された博物館特別展とそのシンポジウム & 連続講演会 聴講まとめ
資料図集

1. 魏志倭人伝等中国史書にみる日本 弥生から古墳時代にかけての時代変遷
2. 中国鏡・三角縁神獸鏡の出土分布と編年 遺跡・遺物が示す日本の変化
3. 弥生時代の鉄器出土分布の変化
4. 卑弥呼邪馬台国から大和王権の確立へ
5. 鉄の歴史年表
6. 歴史年表と編年対応

参考 2010 年秋 関西での博物館連携で開催された

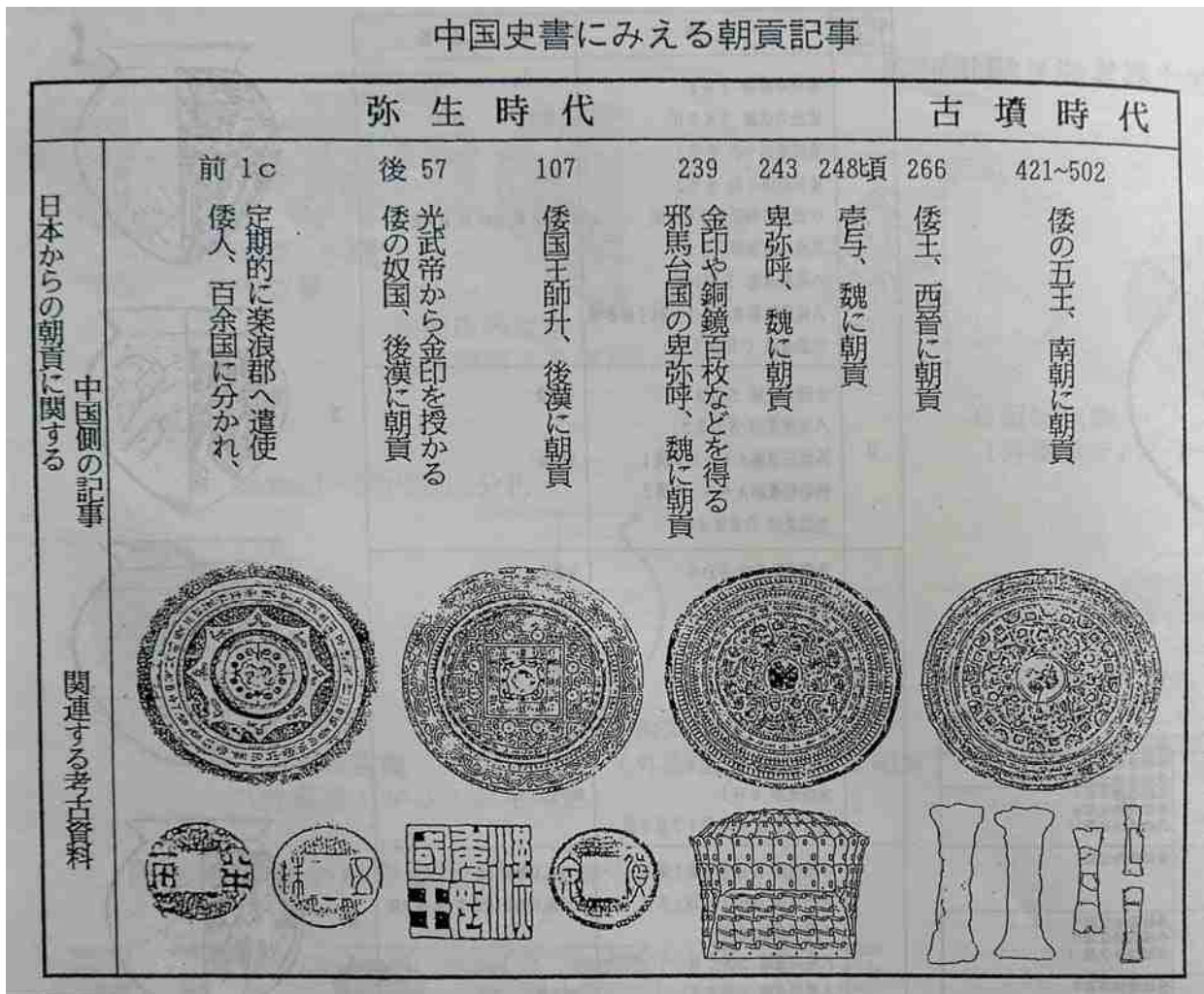
「鉄から見た弥生から大和への時代変遷」関連の特別展リスト

- 2010 年 10 月 2 日～12 月 5 日
近つ飛鳥博物館「鉄とヤマト王権」 邪馬台国から百舌鳥・古市古墳群の時代へ
- 2010 年 10 月 30 日～12 月 5 日
兵庫県立考古博物館ふるさと発掘展「弥生の鍛冶工房 五斗長垣内遺跡への道」(淡路島震災記念館)
- 2010 年 10 月 2 日～11 月 28 日
兵庫県立考古博物館「茶すり山古墳」巨大円墳に眠る播磨の王
- 2010 年 9 月 22 日～11 月 23 日
天理大学付属天理参考館「よみがえるヤマトの王墓」東大寺山古墳と謎の鉄刀
- 2010 年 10 月 9 日～12 月 12 日
大阪府立弥生博物館 九州と近畿「邪馬台国」

参考資料

1. 近つ飛鳥博物館「鉄とヤマト王権」特別展 図説
2. H22 年 ふるさと発掘展「弥生の鍛冶工房 五斗長垣内遺跡への道」 兵庫県立考古博物館・淡路市教育委員会
3. 近つ飛鳥博物館 H22 秋季特別講演会資料 近つ飛鳥博物館白石太一郎氏講演資料「倭国連合形成と鉄」
4. H22 年 ふるさと発掘展「弥生の鍛冶工房 五斗長垣内遺跡への道」連続講演会資料
芦屋市教育委員会 森岡秀人氏講演資料「鉄と青銅 近畿弥生社会における金属器生産」
5. H22 年 ふるさと発掘展「弥生の鍛冶工房 五斗長垣内遺跡への道」シンポジウム資料
「五斗長垣内遺跡の謎にせまる」
6. H20 年兵庫県立考古博物館 ふるさと発掘展シンポジウム 資料
「倭国連合の成立と姫路地域の役割」
7. 村上恭通氏「古代国家の成立過程と鉄器生産」(青木書店)
8. 野島 永 氏「鉄から見た弥生・古墳時代の日本海交流」
9. 弥生博物館 H17 特別展「北陸の玉と鉄」弥生王権の光と影 図説
10. 香芝市教育委員会 2006 年ふたかみ邪馬台国シンポジウム 6 資料集
「邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨・と大和」
11. 播磨学研究所 最新考古学事情「播磨から読み解く邪馬台国」(神戸新聞総合出版センター)

1. 中国史書 魏志倭人伝 にみる日本 弥生から古墳時代にかけての時代変遷



■ 倭国 百余国の首長国とそれらの盟主 女王国(邪馬台国)への経路

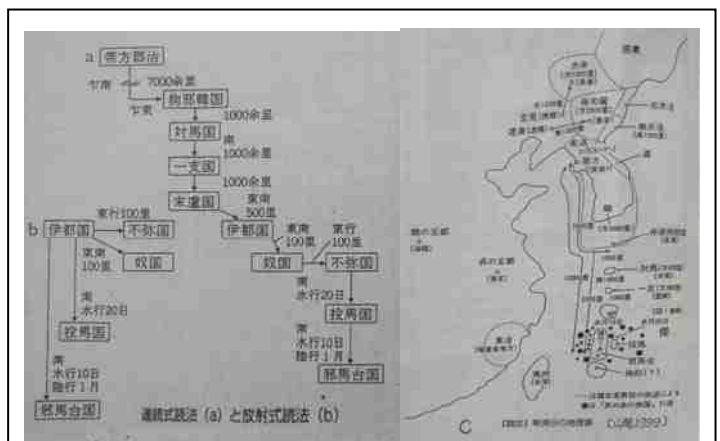
倭人は帯方の東南大海の中にあり、山島に依りて國邑をなす。旧百余國。漢の時朝見する者あり、今、使訳を通ずる所三十國。郡より倭に至るには、海岸に循って水行し、韓國をへて、たちまち南したちまち東し、その北岸狗邪韓國に至る七千余里。

始めて一海を渡ること千余里、對馬國に至る。その大官を卑狗といひ、副を卑奴母離という。居る所絶島にして、方四百余里ばかり。土地は山険しく深林多く、道路は禽鹿のこみちの如し。千余戸有り、良田無く、海物を食いて自活し、船に乗りて南北に市糶す。

又南に一海を渡ること千余里、名づけて瀚海という。一大國に至る。官をまた卑狗といひ、副を卑奴母離という。方三百里ばかり。竹木叢林多く、三千ばかりの家有り。やや田地有り、田を耕せどなお食足らず、また南北に市糶す。

又一海を渡ること千余里、末盧國に至る。四千余戸有り。山海にそいて居る。草木茂盛して、行くに前人を見ず。好んで魚鰓を捕うるに、水、深淺と無く、皆沈没してこれを取る。東南のかた陸行五百里にして、伊都國に至る。

官を爾支といひ、副を泄謨觚・柄渠觚という。千余戸有り。世王有るも皆女王國に統属す。郡の使が往来し、常に駐る所なり。



魏書の筆者の地理感と方向の読み替え 邪馬台国論争

- **倭国の盟主女王国(邪馬台国)が北部九州の伊都国に「官」を置き、大陸・朝鮮半島との物流を支配**
女王國より以北には、特に一大率を置き、諸國を檢察せしむ。諸國これを畏憚す。
常に伊都國に治す。國中において刺史の如きあり。
王、使を遣わして京都、帯方郡、諸韓國に詣り、および郡の倭國に使用するや、皆津に臨みて搜露し、文書、賜遺の物を伝送して女王に詣らしめ、差錯するを得ず。
邪馬台国の北方の諸国には一大率という官が置かれ、諸国を監視していた。一大率は常に伊都国で治めていた、魏の刺史のような役目を果たしていた。
伊都国は中心地で、王が魏の都、帯方郡、韓の国々に使者を派遣する際や、郡の使者が倭国に来たさいは、皆が港に臨んで文書や贈物の点検をして女王に送っていたので間違いは起きない。
邪馬台国 卑弥呼の時代 邪馬台国は伊都国に一大卒という官を置き 大陸・朝鮮半島と国内諸首長国との間の文物の出入りを厳しく監視していた。
北部九州の首長国が握っていた大陸・朝鮮半島との交易・物流の支配権が女王国邪馬台国(連合)に移っていることを記録している。 この物流の中心は「朝鮮半島の鉄」であろう。

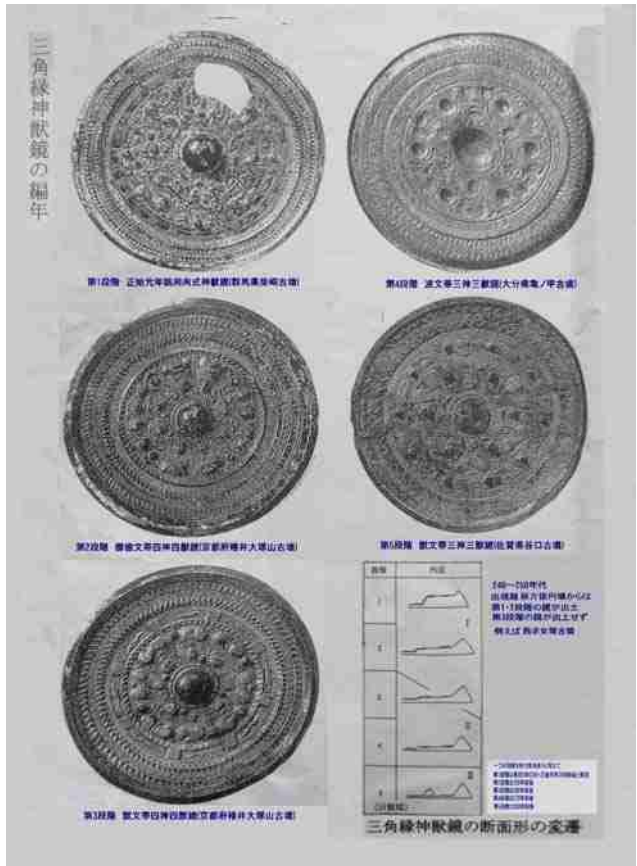
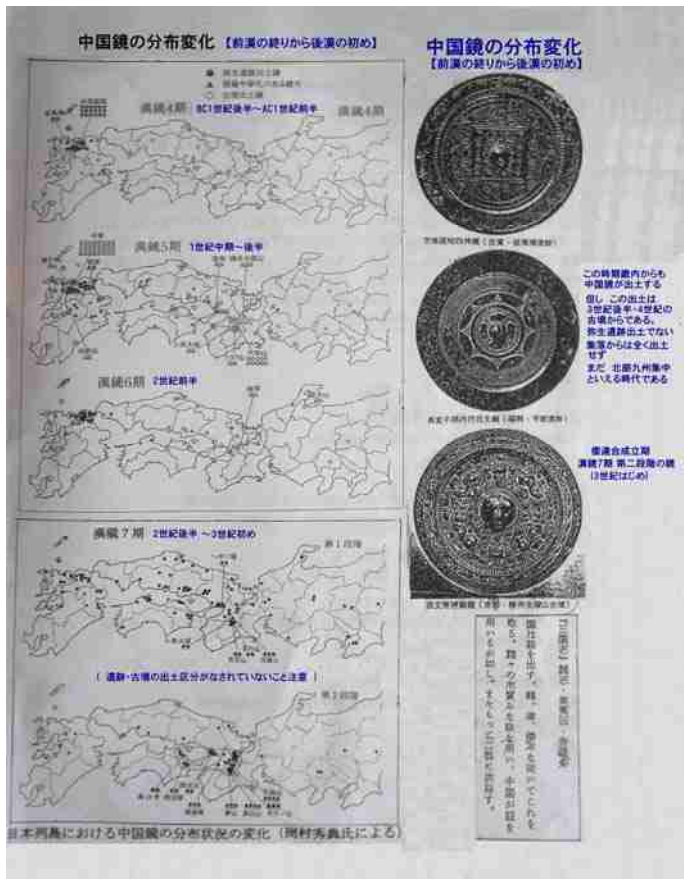
- **倭国の大乱と卑弥呼の女王国連合(邪馬台国連合)の誕生と卑弥呼のプロファイル**
その國、本また男子を以て王となし、住まること七、八十年。倭國乱れ、相攻伐すること歴年、乃ち共に一女子を立てて王となす。名付けて卑彌呼という。
鬼道に事え、能く衆を惑わす。年已に長大なるも、夫婿なく、男弟あり、助けて國を治む。王と爲りしより以来、見るある者少なく、婢千人を以て自ら侍せしむ。ただ男子一人あり、飲食を給し、辞を伝え居処に出入す。宮室、樓觀、城柵、嚴かに設け、常に人あり、兵を持して守衛す。
倭国には元々は男王が置かれていたが、**国家成立から 70~80 年を経た漢の靈帝の光和年間の頃に政情不安が起き、歴年におよぶ戦乱の後、女子を共立し王とした。その女王が卑弥呼である。**
女王は鬼道によって人心を掌握し、既に高齢で夫は持たず、弟が国の支配を補佐した。卑弥呼は 1,000 人の侍女に囲われ宮室や樓觀で起居し、巡らされた城や柵、多数の兵士に守られていた。王位に就いて以来、人と会うことはなく、一人の男子が飲食の世話や取次ぎをしていた。
宮殿には樓閣(たかどの)や、城柵などが嚴重につくってあり、警備兵が常に武器を持ち守衛している。
この魏志倭人伝に記載された戦乱を「倭国の大乱」という。この倭国の大乱が何をさすのか よく判っていない。この大乱の後 北部九州の握っていた大陸・朝鮮半島との交易物流権が邪馬台国連合に移っていることは邪馬台国連合の性格を考えるうえで極めて重要で、「大陸の鉄」の交易物流権と考えられている。
また、卑弥呼の宮殿の様子が記述されており、本年 大和纏向遺跡で宮殿跡とみられる遺構が出土した。また、九州吉野ヶ里遺跡も大規模な城柵・樓觀など宮殿の様相を示している

- **卑弥呼邪馬台国の朝貢 景初2年(238年)の記事**
景初二年六月、倭の女王、大夫難升米等を遣わし郡に詣り、天子に詣りて朝獻せんことを求む。
太守劉夏、使を遣わし、將って送りて京都に詣らしむ。その年十二月、詔書して倭の女王に報じていわく、「親魏倭王卑彌呼に制詔す。帯方の太守劉夏、使を遣わし汝の大夫難升米、次使都市牛利を送り、汝献する所の男生口四人、女生口六人、班布二匹二丈を奉り以て到る。女王は景初2年(238年)以降、帯方郡を通じ数度にわたって魏に使者を送り、皇帝から親魏倭王に任じられた。

- **正始8年(248年)、邪馬台国と狗奴国との紛争**
正始8年、太守王基官に到る。倭の女王卑弥呼、狗奴國の男王卑弥弓呼と素より和せず。
倭の載斯烏越等を遣わして郡に詣り、相攻撃する状を説く。塞曹工史張政等を遣わし、因って詔書・黄幢をもたらし、難升米に拜仮せしめ、檄をつくりてこれを告諭す。
正始8年(248年)には、邪馬台国と狗奴国との紛争に際し、帯方郡から塞曹掾史張政が派遣されている。この狗奴国の場所は明確になっていないが、濃尾平野・東海地方と考えられている。

近つ飛鳥博物館館長白石太一郎氏は日本の古代国家成立について「この狗奴国をはじめ東国の国々が、邪馬台国連合に加わり、加わった時期は不明なるも出雲・丹後も加わって前方後円墳を象徴とする大和初期王権が成立し、統一国家が形成 古墳時代の幕開けとなったのではないかと」の仮説を提唱

2. 中国鏡・三角縁神獸鏡の出土分布と編年 遺跡・遺物が示す日本の変化



漢鏡4期 紀元前1世紀後半から ずっと鏡の出土は北部九州に独占されていたのが、
 漢鏡7期第二段階 3世紀初めになると一機にその出土が大和に変化し、北部九州から消え去る。
 (瀬戸内海地域の3・4世紀の古墳からも、漢鏡6期7期の鏡が出土するが、
 鏡が示す時期と出土古墳が大きく異なり、異論があるので 検討からはずして見ている。)
 また、漢鏡に続く三角縁神獸鏡のうち、一番古い三角縁神獸鏡 正始元年(240)・景初3年(239)の銘のある第一・250年代
 と考えられる第二段階の鏡は出現期の前方後円墳からしか出土しない。

このことから 3世紀半ば 北部九州の勢力にとって代わって大和王権が成立するという大きな変革があったことが、中国鏡・三角縁神獸鏡の出土変化からうかがえ、魏志倭人伝 邪馬台国連合の伊都国での大陸との流通統制の記述と符合する

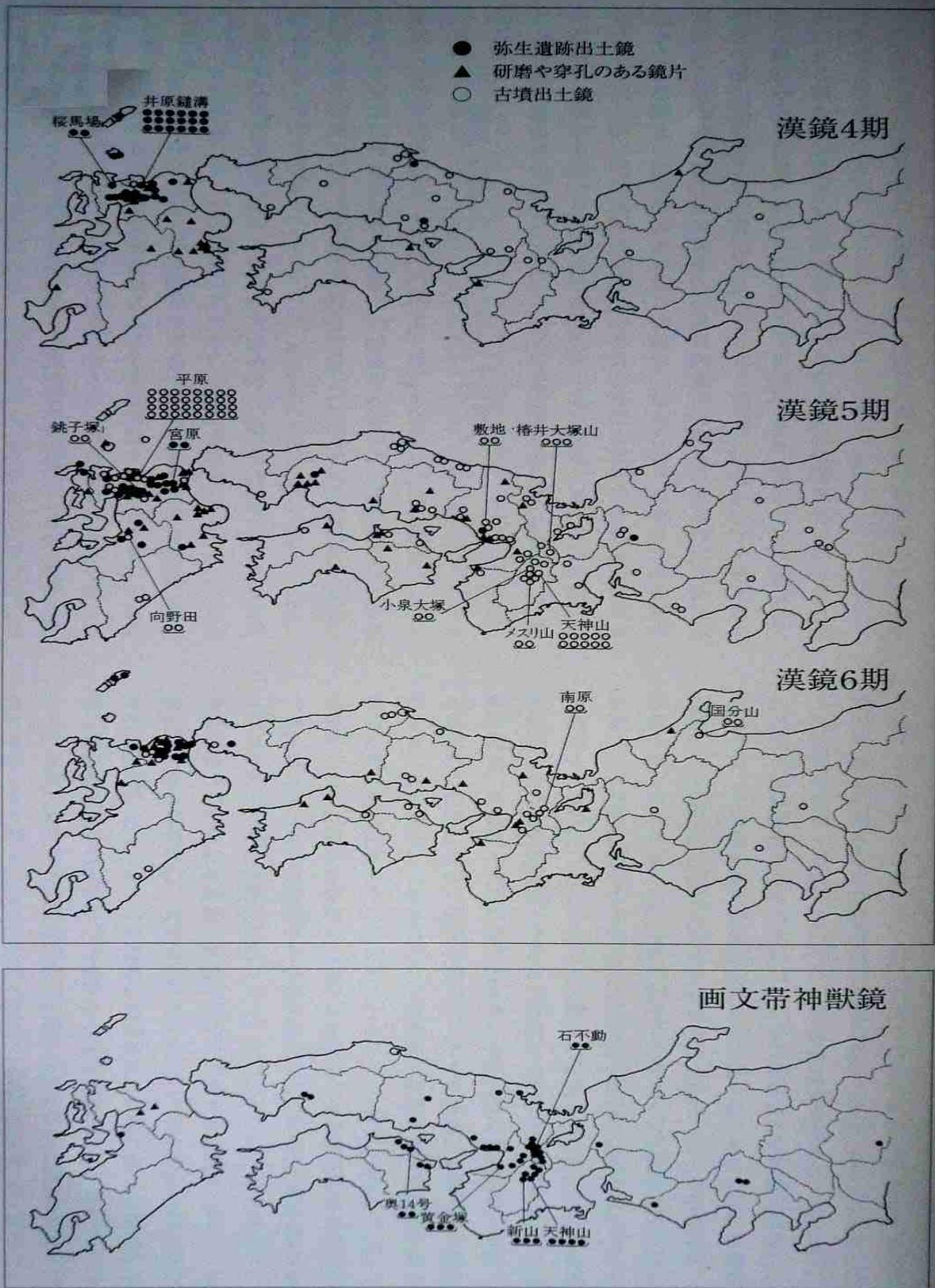
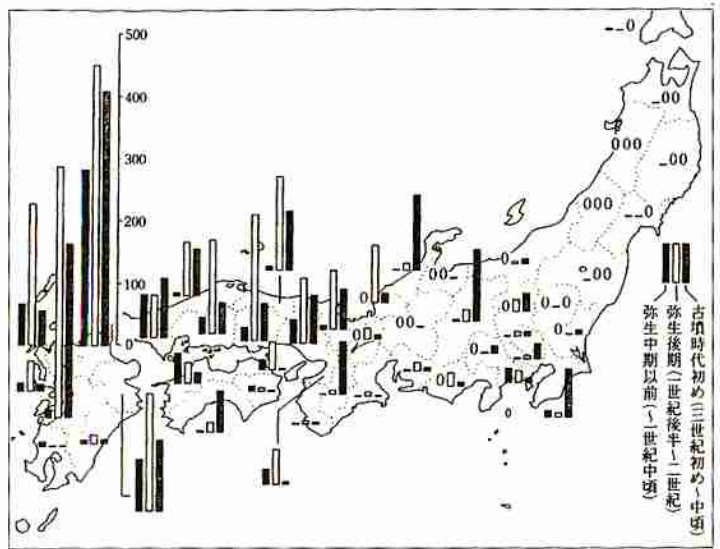
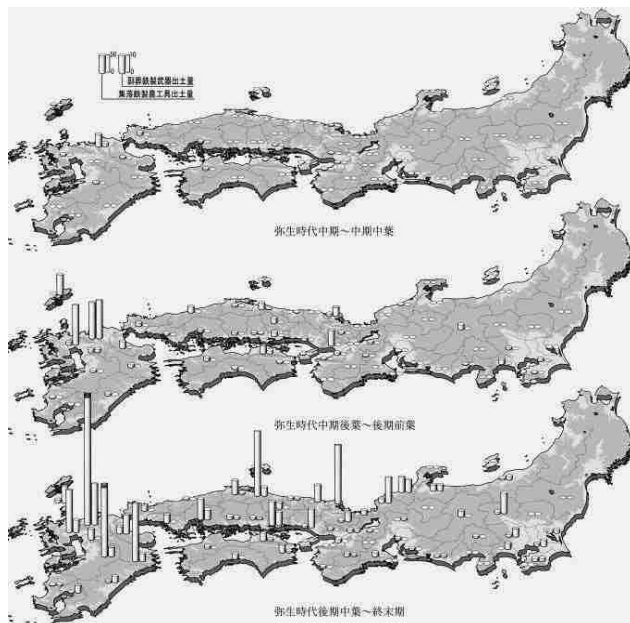


図4 日本列島における中国鏡の分布状況の変化（岡村秀典氏による）

3. 弥生時代の鉄器出土分布の変化

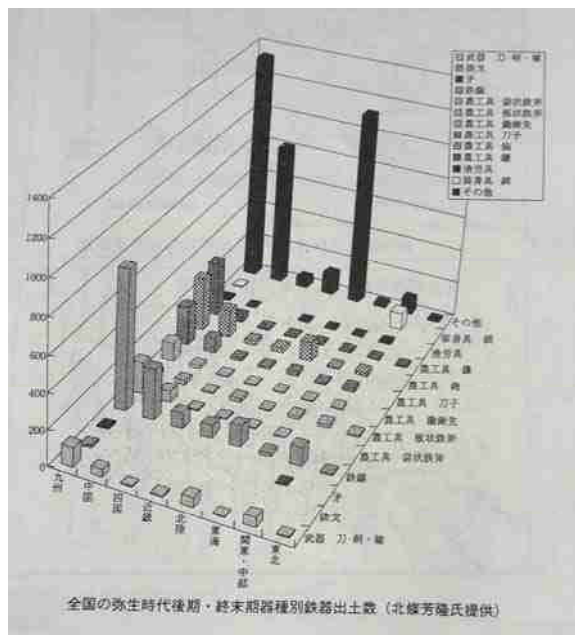


都道府県名	鉄刀	鉄剣	鉄矛	鉄戈	鉄鏃	工具・他	合計
福岡	22	38	9	15	80	211	375
佐賀	7	7	4	2	4	22	46
長崎	3	17	3	3	15	54	95
熊本	0	1	0	0	6	212	219
大分	0	2	0	0	20	88	110
宮崎	0	2	0	0	10	4	16
鹿児島	0	9	0	0	12	6	27
山口	1	0	0	0	5	13	19
島根	0	0	0	0	0	11	11
鳥取	0	0	0	0	4	1	5
広島	0	0	0	0	1	12	13
岡山	0	0	0	0	1	19	20
徳島	0	0	0	0	0	1	1
香川	0	1	0	0	0	40	41
愛媛	0	0	0	0	3	11	14
高知	0	0	0	0	2	1	3
大阪	0	0	0	0	19	14	33
和歌山	1	1	0	0	0	0	2
奈良	0	0	0	0	0	1	1
合計	34	78	16	20	182	721	1,051



地図1 県別にみた鉄器の出土数

鉄器は弥生時代を通じて圧倒的に北部九州に集中する。3世紀初めにヤマト王権が誕生してもいぜんこの傾向は変わらないが、東日本にも普及しはじめる。この直後、3世紀後葉以降の定型化した前方後円墳からの大量の鉄器副葬によって九州と近畿の鉄器量は逆転する(寺沢薫氏による説明。地図1は、川越哲志編「弥生時代鉄器総覧」(2000年刊)を一部時期補正して寺沢薫氏が作成)



日本列島弥生時代の鉄器(註1)文献より作成(川越哲志2000, 寺沢薫2005 改)

地域	時代	前期					中期					後期					計				
		武器	農具	武器	農具	不明	武器	農具	武器	農具	不明	武器	農具	武器	農具	不明					
北海道		2		2		10	1							1			15				
東北				1	1									2	2		11				
関東・甲信越						85	1	2		12	114	32	293	16	259	764					
中部						7	1			1084	15	109		154	1366						
近畿						3	1			30	7	25	2	1965		1434					
中国						5	0	3	41	1	309	247	12	331	3	219	1261				
四国										6	32	7	5	5		4	43				
九州						1					4		6		32	43					
和歌山										1	1	1	1	5		6	23				
京都						6				6	273	66	4	153	1	37	546				
大阪						1	14		13		10	30	2	33	1	82	188				
兵庫						4	33	3	14		30	136		129	1	88	408				
中部						4	1			6	82	6	28		47	816	80	424	5	829	1927
鳥取										7		3	179	24	85		234	536			
島根												3	136	12	36	2	33	226			
岡山										22	1	8		9	118	15	118	168	452		
広島										20	1	5	13	109	18	67	2	132	385		
山口										2	1		5	30	4	15	11	83	1	61	314
徳島										33	1	23		105	89	20	109		64	424	
大分						14	6	3		48	261	41	148	4	265	1116	538	1291	23	1661	5398
福岡						18	3	2		25	174	17	94	2	144	580	238	426	14	291	2025
佐賀						3	1	1			41	7	25		18	152	89	64		49	450
長崎										19	3	6	2	8	35	11	85	6	85	331	
熊本						1				12	6	18		15	239	148	330		1105	1840	
大分										2	20	38	8	2	71	112	54	266	3	83	595
宮崎											1				5	28		107	1	41	188
鹿児島											3	2	1		3		3		2	14	
合計											1										1
計						227	7	5	1	69	849	62	215	7	757	3276	708	2485	40	4363	12883



第106図 弥生時代の鉄器普及地域のまとめりと交易形態

1. 九州北部中枢地域 2. 九州地方周辺地域 3. 山陰・北陸地域 4. 瀬戸内東部地域 5. 畿内地域 6. 関東・中部地域

弥生時代早期～弥生中期 中国から持ち込まれた鑄造鉄斧が鉄器の伝来のスタート

その後 朝鮮半島から鉄器や鉄素材を輸入する一方、弥生時代の中期には北部九州で鉄器の鍛冶加工がはじまり、

その後 弥生後期から終末期にかけて山陰・丹後・北陸など日本海沿岸諸国並びに瀬戸内で拠点的な鉄器生産が始まる

ただし、実用利器は非常に限られた小物生産で また、鉄器加工生産の量・質・技術には 西から東に行くほど退化の傾向があり、素材の輸入を朝鮮半島に頼り、その流通を主に北部九州に頼っていたことが色濃く反映されている。

3. 弥生人の鉄器に対する価値観とその背景 (後期中葉以降)

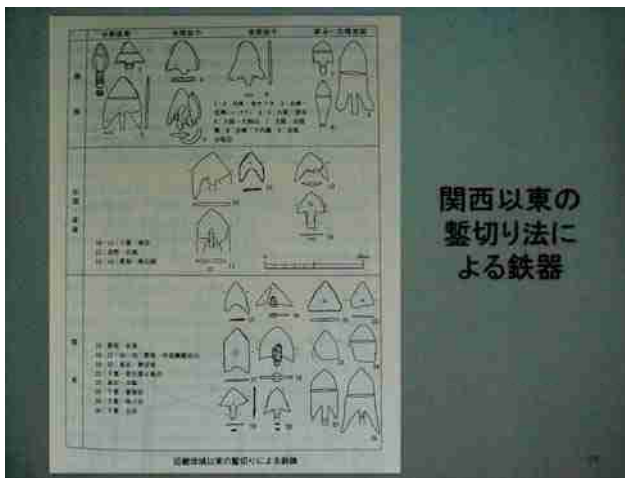
- ①自給できた一般的な鉄製品: 錐、鉈、小型板状鉄斧、鏃 = 鉄の消費が少ない鉄製品
- ②鉄製武器(短剣・ヤリ・矛)や舶載鉄器に対する信仰...地域差
- ③日用鉄器・利器を充実化する社会(北部・中部九州)と非日用鉄器を求める社会(中部・関東地方)
- ④集落出土鉄器が多い地域と埋葬址出土鉄器が多い地域の相違...関西以東

弥生時代は鉄器流入による農耕文化と思われるがちであるが、鉄器素材を独自に作る事ができず、広く大量に鉄を利器として使われるのはむしろ古墳時代以降である。

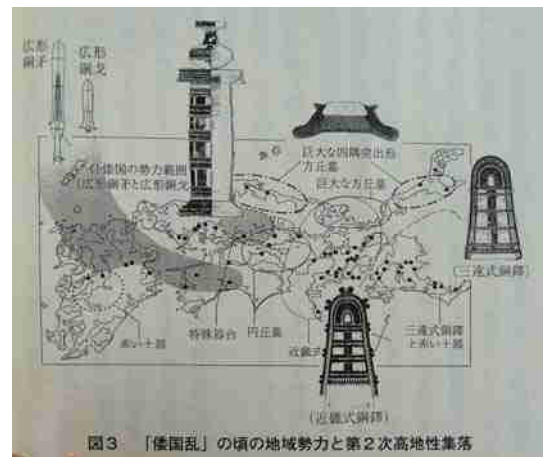
鉄器の使用は本当に限られ、日本各地の地方でその鉄の使われ方もまだ、ばらばらである。

鉄素材を自由に独自に作れず、加工技術も朝鮮半島に頼らねばならない時代 先進地からの距離が鉄の技術・価値感にも色濃く反映している。

村上恭通 2010. 11. 21. 五斗長垣内遺跡シンポジウム スライドより



高度な技術を有する鍛冶加工鉄製品が実用利器として用いられる九州に対し 関西以東では鑿切り法による鉄器生産 鉄器生産の実力が朝鮮半島より先進技術が入る北部九州とそれ以外のところで大きな差がある。



日本海沿岸の諸国では
北部九州経由でない独自ルートで朝鮮半島と持っていた??
それぞれ 独自の文化を花開かせ、鉄の蓄積も図っている。



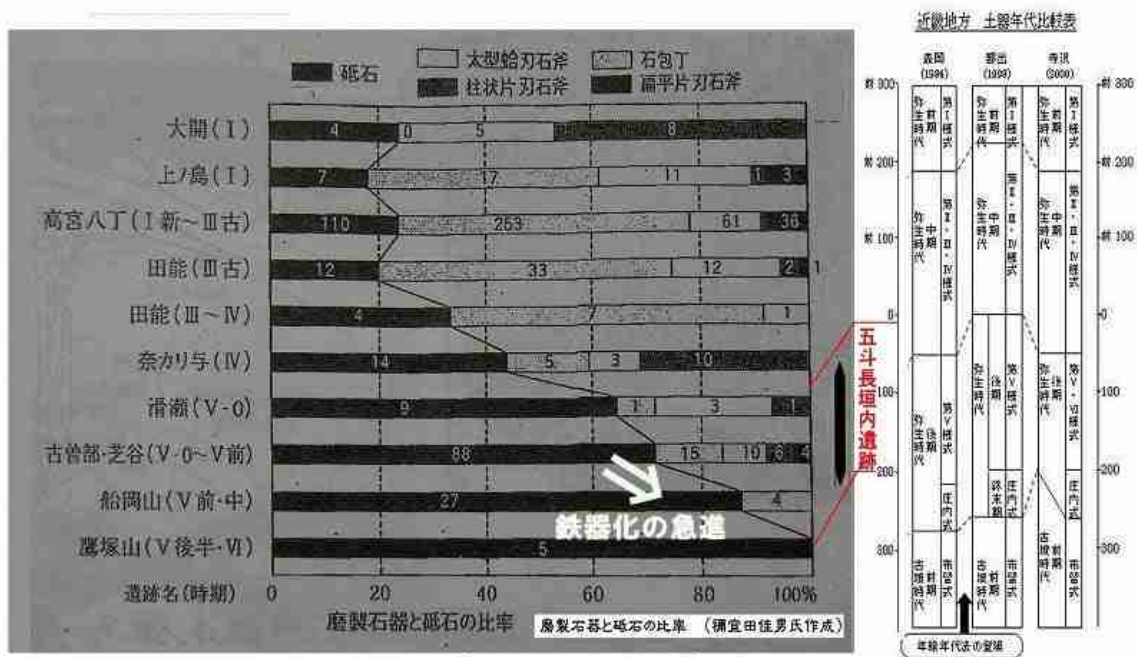


【鑄造鉄器の伝来 弥生時代早期～弥生中期 中国から持ち込まれた鑄造鉄斧】

弥生時代の中期には北部九州で鉄器加工がはじまり、その後 弥生後期から終末期にかけて山陰・丹後・北陸など日本海沿岸諸国並びに瀬戸内で拠点的な鉄器生産が始まる。ただし、実用利器は非常に限られた小物生産で また、鉄器加工生産の量・質・技術には 西から東に行くほど退化の傾向。

集落から出土する実用鉄器は 腐食によって 土中に消えてしまうことが多く、その出土数は小さい。しかし、鉄斧の柄の出土や急速な石器出土数の減少などから 石器社会から鉄器社会への激変がうかがえ、「幻の鉄器」と呼ばれる。

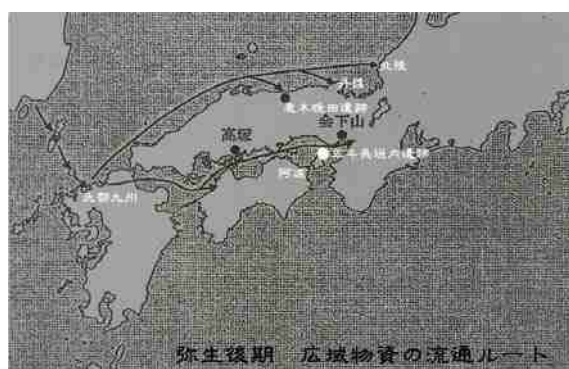
弥生後期 鉄器出土数の少ない近畿地方でも その後半には急激な鉄器化が進んでいることが、「幻の鉄」の存在からうかがえる。



弥生時代後期(1世紀半ば~2世紀)には出土する石器のほとんどが砥石となり、石器製の農耕具の出土が激減する近畿地方においても この時代に実用鉄器の時代へ入ったことがうかがえる。
(腐食等で鉄器の出土は少ないが、鉄斧の柄が出土するなど実用鉄器の時代へ入ったことがうかがえる)

弥生の後期 近畿地方での鉄器需要急増の変化を示出土石器の急変

【瀬田田佳男氏作成資料を基に整理して本図作成】



4. 卑弥呼邪馬台国から大和王権の確立へ

近つ飛鳥博物館白石太一郎館長の説

卑弥呼の時代 東海地方には前方後方墳を作る大和とは異なる文化があった。

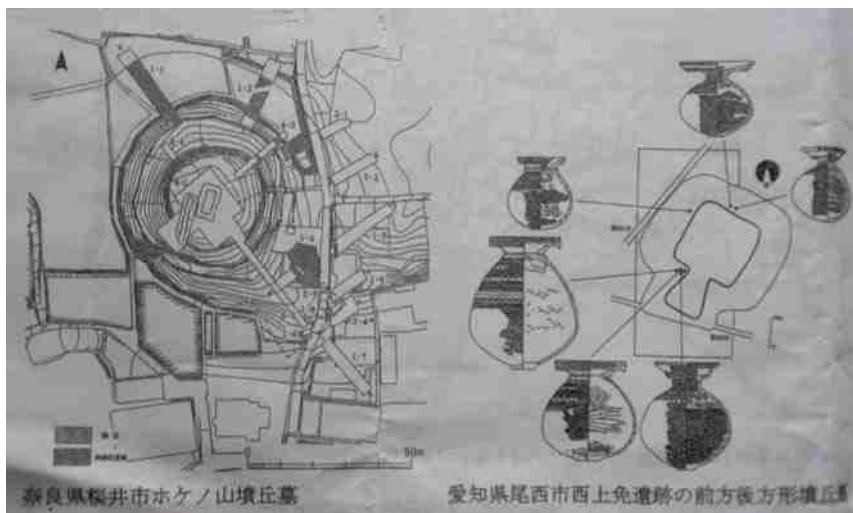
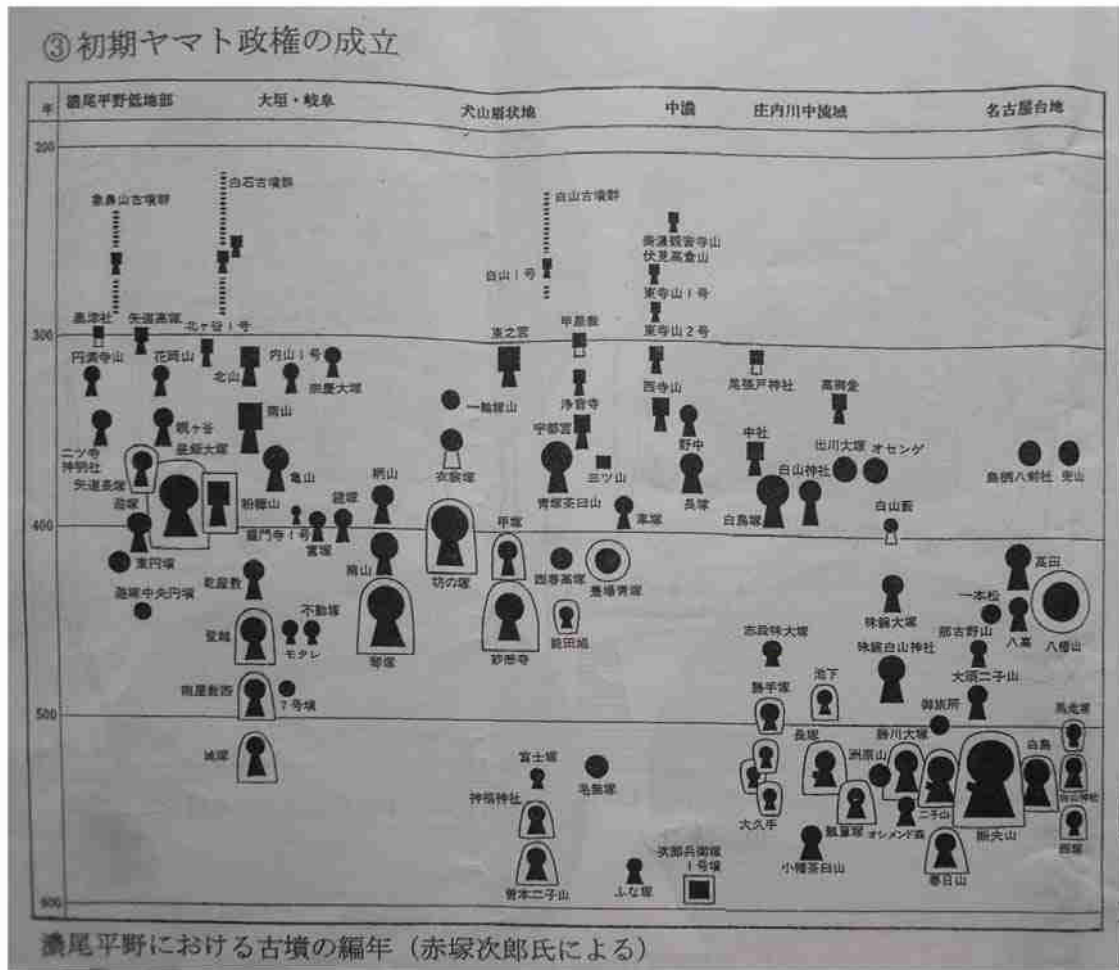
卑弥呼と対立していたという魏志倭人伝にも記載がある狗奴国がこの東海地方ではないかという。

正始8年(248年)、邪馬台国と狗奴国との紛争に際し、帯方郡から塞曹掾史張政が派遣されている。

この狗奴国の場所は明確になっていないが、濃尾平野・東海地方と考えられている。

そして 纏向遺跡が隆盛する4世紀この東海地方は前方後方墳を捨て 一機に前方後円墳を築造する。

この時期か纏向遺跡隆盛と一致し、卑弥呼連合にさらに東海から東国 出雲・丹後・越などの日本海側諸国も加わって大和王権が成立。新しい体制が必要になった大和王権がその根拠としたのが、纏向ではないかと



5. 鉄の歴史年表



1. 縄文晩期～弥生前期 紀元前2世紀～紀元1世紀 **【鑄造破片再生の時代】**

中国・朝鮮半島との交流は縄文時代晩期には既に始まっており、中国にその起源をもつ鉄器が日本に現れ、その後弥生前期には中国で製造された鑄物製の鉄斧などの破片を日本で割るなどの再加工して使用する事が始まる。
2. 弥生時代中期～後期 紀元1世紀～3世紀初頭 **【原始鍛冶の時代】**

薄く板状に鑄込み表面脱炭去れた素材が日本に持ち込まれ、曲げなど簡単な鍛冶が行われるようになる。
3. 弥生時代後期以降～古墳時代中期 2世紀～4世紀 **【鍛打伸展鍛冶の時代】**

中国では脆い鑄鉄鑄物ばかりでなく、鉄鉱石を低温還元焼成してつくられた塊状錬鉄が得られるようになり、脱炭鑄鉄と同時に日本にこれらが持ち込まれるようになり、これらを素材とした鍛錬加工(原始鍛冶)がスタートし、次第に本格鍛冶へと移って行く。
4. 古墳時代初頭以降 初期～中期 3世紀前半～5世紀 **【本格鍛冶の時代】**

大陸では塊状鉄精錬が本格化し、鍛冶材料として広く流布。朝鮮半島でもこの塊状鉄精錬がスタートしたと見られるが、はっきりしない。

この当時 半島朝鮮半島の南部辰韓・加耶と倭国との交流が始り、4世紀半ばには加耶が鍛冶加工された薄い鉄板(鉄鋸)の供給基地として登場し、渡来人の交流と共に大量の鉄鋸が鍛冶原料として持ち込まれるようになる。当初3世紀には北九州に限られた鉄の先進地が5世紀には瀬戸内・出雲・吉備・畿内へと東進してゆく。この間日本に於いてはこれら朝鮮半島から持ち込まれた鉄鋸と共にこの鍛冶・加工に使った鍛冶炉跡や鍛冶滓が大量に見つかるようになる。

5世紀後半になると畿内には大泉遺跡のような大規模な專業鍛冶集団が生まれて勢力を伸ばす。
5. 古墳時代中後期～飛鳥・奈良 5世紀末～8世紀 **【鉄生産・鉄の自給拡散の時代】**

その始りはまだはっきりしないが、5世紀末から6世紀初頭にかけて 鉄鉱石原料とした箱型炉による製鉄精錬が日本国内(吉備)で始り、鉄素材の自給が始まった。また 国内に大量に存在する砂鉄を原料とした精錬も始り、日本での鉄自給の波が西国から東へ広がって行く。

7世紀末から8世紀には現在の福島県原ノ町近傍(行方製鉄遺跡)まで広がりさらに、9世紀には青森岩木山北山麓での製鉄が確認されている。
6. 奈良・平安時代 8世紀～11世紀 **【鉄の多様化の時代】**

堅型炉が関東・東国に出現し、大型の箱型炉や鑄物遺跡の出現など鉄生産が日本全国におよび、鉄生産の多様化が進む。本格的な鑄物生産がはじまり鉄の多様化がはじまる。
7. 中世 15世紀以降 **【鉄の量産化の時代】**

高殿たたらが鉄山経営として成り立ち 出雲など中国地方の生産が他を圧倒して行く

6. 歴史年表と編年の対応

古墳時代以前 日本には文字がなく、年代検討を行うには文字で年号が記載されている中国史書を手掛かりに土器器編年・鏡編年などを組み合わせて年代を検討する。史書は日本の弥生・古墳時代の時代比定ををする有力な司法である。それに 最近では 加速器 C14 年代測定法 年輪年代測定法など制度の良い年代測定法が用いられ、数 10 年単位程度にも年代が比定できるようになりつつある

考古年代と科学年代の比較対照年表 (森岡2005bから、一部加筆)

暦年代	出土土器の器内様式編年	年輪年代	AMS法 ¹⁴ C年代	できごと	中国王朝	
紀元前	[森岡 1984] 長原式(単純期)	[森岡 1998] 船橋式 長原式(単純期)	[光谷 2000] [光谷 2005] ☆B.C.445年+a(東奈良) ☆B.C.445年+a(東武庫)	[国立歴史民俗博物館 2001] [名古屋大学 2003] [華成 2008]	●B.C.494年 越の滅亡	春秋
	船橋式			前期末 (第1様式)		403
	長原式(単純期)	I-1様式 (長原式)			中期初頭～前半 (第2様式)	
		I-2様式 (長原式)	☆B.C.297年+a(八日市地方) ☆B.C.272年+a(下之郷) ☆B.C.248年(南方) ☆B.C.245年+a(武庫庄) ☆B.C.243年(南方) ☆B.C.223年+a(下之郷)		●B.C.312~279年 燕の東方進出	戦国
	第I様式(古) (長原式)	I-3様式		中期前半～中頃 (第3様式[古])		
	第I様式(中) (長原式)	I-4様式			●B.C.221年 秦の始皇帝が韓・趙・魏・楚・燕・斉を滅ぼし、中国を統一 ●B.C.202年 漢高祖劉邦、帝位につく	221 秦
	第I様式(新)	II-1様式 II-2様式				202
		II-3様式				
	第II様式(古)	III-1様式				
	第II様式(新)	III-2様式				
紀元	第III様式(古)	IV-1様式	☆B.C.115年(桂見)			
	第III様式(新)	IV-2様式	☆B.C.97年(二ノ畦・横枕)			
	第IV様式(前半)	IV-3様式	☆B.C.60年(二ノ畦・横枕) ☆B.C.52年(池上・曾根)			
		IV-4様式				
	第IV様式(後半)	V-1様式	☆A.D.51年+a(大友)			
	第V様式(1)	V-2様式	☆A.D.69年+a(下野) ☆A.D.78年(蔵分城) ☆A.D.87年+a(雀居)			
	第V様式(2)	V-3様式				
	第V様式(3)	V-4様式	☆A.D.145年(大友西) ☆A.D.152年(青谷上寺地) ☆A.D.168年(朝日) ☆A.D.169年(大友西)			
	第V様式(4)	V-5様式	☆A.D.177年+a(鎌向石塚) ☆A.D.196年+a(二口かみあれた) ☆A.D.198年+a(鎌向野山)			
	第V様式(5)	V-6様式				
紀元後	庄内式(I)	VI-1様式	☆A.D.222年+a(二口かみあれた)			
	庄内式(II)	VI-2様式	☆A.D.247年+a(下田)			
	布留式(I)	VI-3様式 布留1様式	☆A.D.258年+a(蔵王)			

年表

年代	中国	朝鮮	日本	関連する遺跡	
前10000	新石器時代 前8000頃 農耕ははじまる 前3000頃 中国西北地方に銅器出現	櫛目文土器文化	縄文時代 早期 前期 中期 後期 晩期		
前2000	夏 前2000頃 二里頭遺跡で宮殿がつくられる				
前1500	殷 前1600頃 殷(商)王朝ははじまる				
前1000	西周 前1027 周の武王、殷を滅ぼす				
前700	春秋 前770 周、都を洛邑に移す	無文土器文化	弥生時代 早期 前期 中期 後期 終末期	早期 水稲農耕ははじまる 曲り田遺跡	
前500	前552 孔子生まれる			前期 前445 東武庫遺跡棺材(年輪) 大開遺跡	
前400	戦国 青銅器が伝わる 入室里遺跡				
前300	秦 前221 秦、斉を滅ぼす			中期 前245 武庫庄遺跡柱根(年輪) 古津路遺跡	
前200	前漢 前202 漢王劉邦、皇帝に即位			高地性集落出現 七日市遺跡	
前100	前108 漢、衛氏朝鮮を滅ぼし、楽浪郡など四郡をおく			この頃、鉄が普及する 表山遺跡	
1	新 8 王莽、漢を篡奪 25 光武帝劉秀即位			後期 57 倭奴国王、後漢に遣使し印綬を賜う。 107 倭面土国王帥升、後漢に遣使 志賀島金印出土地	
100	後漢			原三国時代	玉津田中遺跡
200	220 後漢献帝、曹丕に禪譲 238 魏、公孫氏を滅ぼす				終末期 239 卑弥呼、魏に遣使 西条52号墓 岩見北山1号墓 内場山墳丘墓 若水古墳
300	三国 265 魏元帝、司馬炎に禪譲 316 西晋滅亡				古墳時代 前期 266 苻与、晋に遣使 城の山古墳
400	南北朝	三国時代	中期 倭の五王、中国南朝に遣使		
500			後期		
600	隋 589 文帝、南朝陳を滅ぼす	飛鳥時代	600 遣隋使派遣 西求女塚古墳		

五斗長垣内遺跡

出典：兵庫県立考古博物館 2008『光は西からー弥生人、文明との出会いー』展示図録より引用、一部改変

時代年代	弥生時代					古墳時代														
	AD1		190	260	400	500	600													
時期	前期	中葉	後期	終末期	前期	中期	後期	終末期												
土器	第Ⅰ様式	第Ⅱ様式	第Ⅲ様式	第Ⅳ様式	第Ⅴ様式	庄内式	布留0式	布留1式	布留2式	布留3式	高蔵216型式	高蔵73型式	高蔵23型式	高蔵47型式	陶器山15型式	高蔵10型式	陶器山85型式	高蔵209型式	高蔵43型式	飛鳥様式

弥生時代・古墳時代の時期区分と暦年代

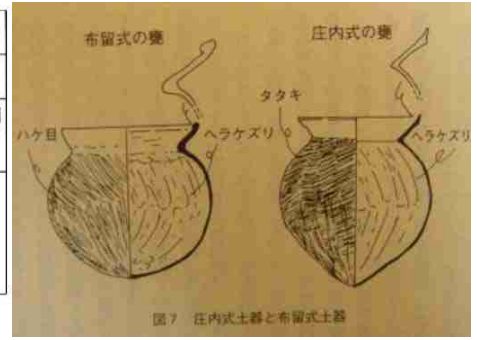
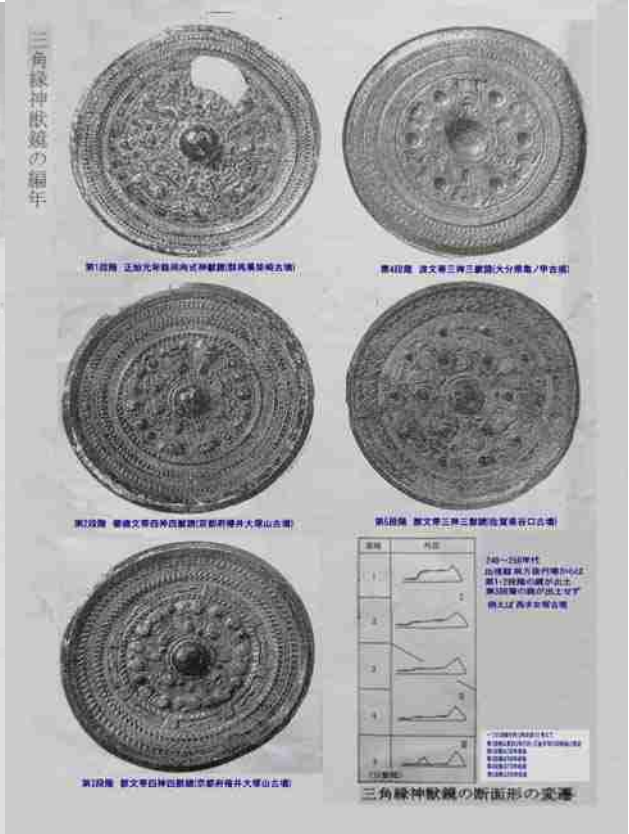
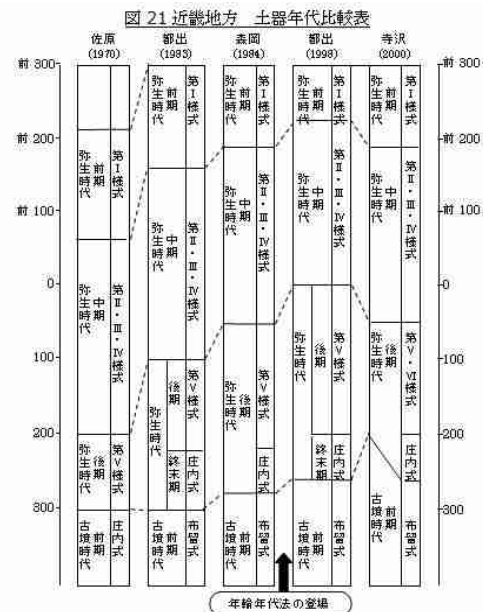


図7 庄内式土器と布留式土器



寺沢案				都出案					
実年代	時代	時期	近畿編年	北九州編年	細分様式	時期	時代	暦年代	
500	縄文	晩期後半(突帯文土器)	滋賀里IV式(口酒井)	山ノ寺式(曲り田式)			早期		
前5世紀				船橋式	夜白式	1			
400			長原式	板付I式	1				
前4世紀	弥生	前期	第I様式	板付II式	1, 2, 3	古中新	前期	300?	
300				第II様式	城ノ越式				1
前3世紀				第III様式					2, 3
200				第IV様式	須玖式				1, 2, 3, 4, 5
前2世紀		中期	第V様式	高三瀨式	1, 2, 3	古新	中期	100?	
100		後期	第VI様式	下大隅式	1, 2, 3, 4				
前1世紀	古墳	初期	庄内式	西新式	1, 2, 3, 4, 5	古新	終末期	200	
B.C.				布留式	(土器形)				Ia, Ib, IIa, IIb, IIIa
1世紀				須恵器				(250)	
100									
2世紀								100	
200									
3世紀								200	
300									
4世紀								300	
400								400	



(注) 以下を参考に作成した
 佐原 眞 「古代の日本 正 近畿」(1970) 都出比呂志 「古物国家はこうして生れた」(1998)
 都出比呂志 「三世紀の九州と近畿」(1993) 寺沢 繁 「玉環養生」(2000)
 斎藤孝人 「大板津沿岸の弥生土器の発掘と 倉神秀夫 「畿和呼の誌 年輪の証言」(1999)
 年代」(1894)